ウイグル文シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書補遺

松　井　　太

はじめに

さきに筆者は，ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部（以下，SPFと略）に所蔵される古ウイグル語文献から計58点の文書断片をとりあげ，これらの文書群が共通の歴史的背景を有しており，13世紀中葉にトゥルファン盆地のトヨク（吐峪 ~ Toyoq < uig. Tïyoq < chin. 丁谷）石窟近辺で活動していたある特定のウイグル仏教徒集団に関係することを論証した．そして，これらの文書群を，文書中に頻出する２人の仏僧シヴシドゥ（Sivšidu < chin. 修士奴）・ヤクシドゥ（Yaqšidu < 薬師奴）にちなんで「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書」と命名した［松井 2004］．

ところがその後，前稿で扱った58点（断片を接合すれば52件）以外にも，やはり「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書」に属するウイグル語文書がSPF所蔵文献に存在し，そのいくつかは既に写真複製まで公刊されていることを知り得た．筆者の未熟ゆえに前稿でこれらの文書に言及できなかったことは，まことに遺憾である．そこで本稿では，これらの文書から既公刊の断片群を中心としてとりあげ，前稿に示した情報や考察を補完する(1)．

1. 文書の概要

筆者が新たにシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とみなすのは**表１**に掲げる９点である(2)．これらの文書には，前稿でとりあげたシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書と共通する人名が現われ，あるいは本来のオモテ面漢文仏典の同定箇所からも既知のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書との接合関係が確認できる［cf. 松井 2004, pp.53-59］．以下にその内容を整理する．

① **3Kr 7-25**：この断片のウイグル文のほとんどは年月日記載のみの題記である．登場する人名はタイソ（Tayso < 大蔵）・ブヤン＝クリ（Buyan-Qulï）２名のみで，彼らはその他のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書には確認されていない．しかし，本来のオモテ面の漢文仏典の同定箇所から，下記

(1) あわせて前稿の誤りを訂正しておく．前稿［p.54］の表１に掲げた4bKr 187aのオモテ面漢文仏典の同定箇所は『十地經論』（T. Vol. 26, No. 1522, 180a09-180a18）が正しい．

(2) **表１**の９件のうち，⑤Дx 3650，⑧Kr IV 395，⑨Kr IV 367については Peter Zieme（BBAW）・Abdurishid Yakup 両氏より種々の情報をご教示いただいた．また，①3Kr 7-25 および Kr IV 252 の写真複製の公刊については（財）東洋文庫より許可を得た．特記して深謝する．

表1

	文書番号	Sivšidu	Yaqšidu	その他の人名	オモテ仏典の經名	『大正藏』巻/経番/頁数		
①	3Kr 7-25			Tayso, Buyan-Qulï	妙法蓮華経	9	262	060b02-060b16
②	Дx 3224	Sivšidu	Yaq[šidu?]	Kuyšidu, Kinšidu	妙法蓮華経	9	262	060b16-060b29
③	Дx 3225			Pusardu-tutung	妙法蓮華経	9	262	048b17-048b29
④	Дx 3226	Sivšidu	Yaqšidu	Kuyši-du, Pusardu(-qul)-šäli, Tiginä	放光般若經	8	221	081c09-081c23
⑤	Дx 3650		Yaqšidu		道神足無極變化經	17	816	813c02-813c06
⑥	Дx 3652				大般涅槃經	12	375	683a11-683a14
⑦	Дx 3654		Yaqšidu	Äsänčim, Tükälä, Tuγmïša, Barïnč-Qïz, Kimqaṭu-šilavanti, Šinvapdu-šilavanti ＝善法奴尸羅	放光般若經	8	221	025a23-025a30
⑧	Kr IV 395			Sambodu-šäli, Pusardu-Qya, Öṭüš-šäli, Čiti	（ウイグル語仏典）			
⑨	Kr IV 367			Singdu-toyïn, Pinguy, Šinmi-šäli, Toǧo-šäli	（ウイグル語仏典）			

② Дx 3224 と直に接合することが判明するので［**接合図(1)**参照］新たにシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とみなすことができる．

② **Дx 3224**：人名シヴシドゥが確認でき，さらにシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書に頻出するクイシドゥ（Kuyšidu < 恵師奴）・キンシドゥ（Kinšidu < 賢師奴）らが現われる．

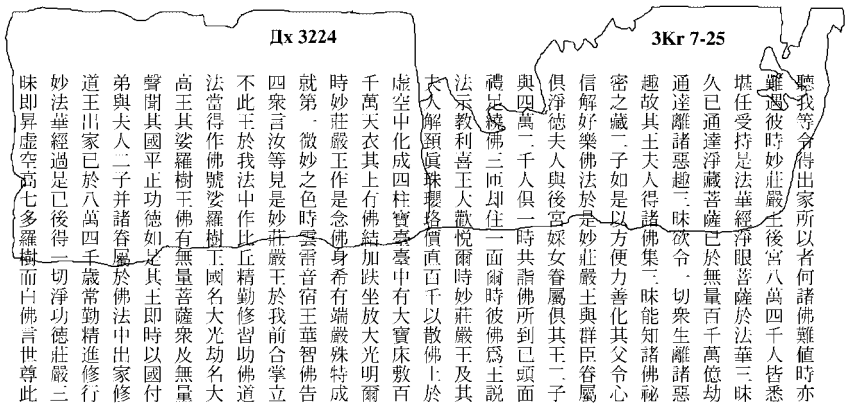
③ **Дx 3225**：シヴシドゥ・ヤクシドゥは登場しないが，プサルドゥ（Pusardu < 菩薩奴）都統が現われる．このプサルドゥ都統は，やはりシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書に頻出する人名プサルドゥ＝シェリ（Pusardu-šäli）またはプサルドゥ＝タズ（Pusardu-Taz）のいずれかに比定される可能性が高い．

④ **Дx 3226**：シヴシドゥ・ヤクシドゥの両名に加え，クイシドゥ，プサルドゥ＝シェリ，ティギネ（Tiginä）らが登場する．また，オモテ面漢文仏典『放光般若經』の同定箇所（T. Vol. 8, No. 221, 081c09-081c23）やウイグル文の筆致・行配置から，前稿で「準シヴシドゥ・ヤクシドゥ文書」とみなした Дx 9535 + 9536 と同一写本の近接する部分と判明する［松井 2004, p.58; **接合図(2)**参照］．

⑤ **Дx 3650**：題記の筆者としてヤクシドゥが現われる．またオモテ面の漢文仏典『道神足無極變化經』の同定箇所（T. Vol. 17, No, 816, 813c02-813c06）から，シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の Kr IV 252 + Дx 12145 と直に接合することが判明する［**接合図(3)**参照］．さらに lines 11-17 によれば，このウイグル文題記はヤクシドゥが「阿弥陀窟（abita qur）という名の寺院（varxar）で，常に登り敬礼したとき」作成したものという．すでに前稿で論じたように，「阿弥陀窟寺（abita qur varxar ~ sängräm）」はトヨク石窟所在の寺院であり，シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の多くはこの寺院で作成された［松井 2004, pp.63-68］．上述の銘文からは，シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の中心人物ヤクシドゥが日常的に阿弥陀窟寺に参詣していたことが示唆され，彼らトヨク石窟の仏教徒集団が阿弥陀窟寺を活動拠点としていたことがあらためて確証される．

⑥ **Дx 3652**：ウイグル文は「犬年正月二十三日に（ït yïl aram ay üč otuz-qa）」という年月日記載と袋文字の「私（män）」という文面のみだが，オモテ面の漢文仏典『大般涅槃經』の同定箇所

接合図(1) 3Kr 7-25 + Дx 3224『妙法蓮華經』(T. Vol. 9, No. 262, 060b02-060b29)

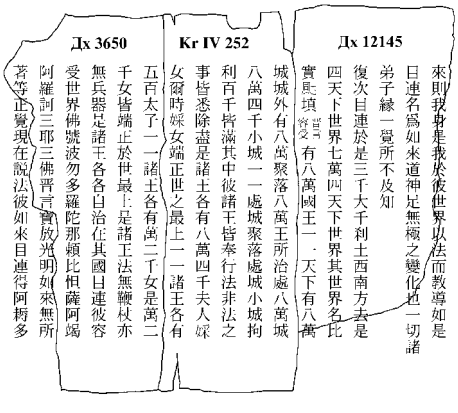


接合図(2) Дx 3226 + Дx 9535 + 9536『放光般若經』(T. Vol. 8, No. 221, 081c09-081c23)

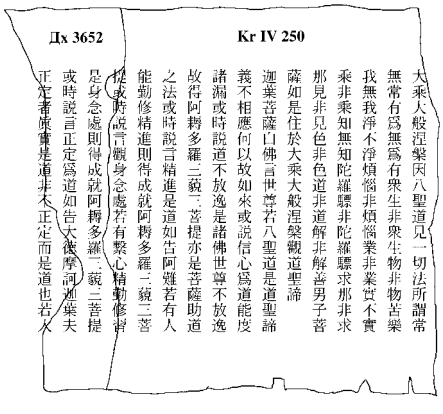


※ 081c13 の「相」, 081c18-081c20 の「爲世間作將爲世間導爲世間舍爲世間趣故」を誤脱

接合図(3) Дx 12145 + Kr IV 252 + Дx 3650『道神足無極變化經』
(T. Vol. 17, No. 816, 813b19-813c06)



接合図(4) Kr IV 250 + Дx 3652 『大般涅槃經』
(T. Vol. 12, No. 375, 682c26-683a14)



（T. Vol. 12, No. 375, 683a11-683a14）から，前稿でシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書として言及したKr IV 250と直に接合する［**接合図(4)**参照；cf. 松井 2004, p.62］.

⑦ **Дx 3654**：題記の筆者としてヤクシドゥ，またキムカドゥ（Kimqaṭu < 金華奴）律師が書簡の草稿部分の筆者として登場する.

⑧ **Kr IV 395v**：この断片は楷書体ウイグル語仏典の紙背を二次利用したものである．シヴシドゥ・ヤクシドゥは登場しないが，サムボドゥ（Sambodu < 三宝奴）・プサルドゥなどシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書と共通する人名がみえる．また [2]män pusardu qy-a bu [3]abita qur-ta [4]iki ay qy-a turup [5]birü tägindim ärti「私プサルドゥめがこの阿弥陀窟（abita qur）に２ヶ月ほど確かに滞在し奉ったのであった」というウイグル銘文から，この断片は阿弥陀窟（寺）で作成されたと考えられ，やはりシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書との関係がうかがえる.

⑨ **Kr IV 367v**：この断片は⑧と直に接合する．その他にも，やはり仏教的人名・称号を有する人物が登場する：シングドゥ＝トイン（Singdu-Toyïn; Singdu < 僧奴），ピングイ（Pinguy < 斌恵(？)），シンミ＝シェリ（Šinmi-šäli; Šinmi < 善明(？)），トコ＝シェリ（Toqo-šäli; Toqo < 道光(？)）.

以上の諸点から，この９点をシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とみなすことに問題はない．また，②～⑦は敦煌（Дуньхуан）出土資料を示すДx番号をもつが，これはおそらくSPFでの整理ミスの結果であり，既知のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書中の Дx文書の諸例と同じくトゥルファン地域将来資料と訂正すべきである［cf. 松井 2004, pp.58-59］.

2. テキスト・和訳・語註

上記①～⑨のうち，⑧⑨についてはAbdurishid氏が校訂・研究を準備中であり，その公刊を鶴首する．また前述のように，⑥にはあらためて校訂を要するテキストはほとんどない．そこで，以下には①～⑤，⑦の６件について校訂テキスト・和訳・語註を提示する．なお筆者は原文書を未だ実見していないので，紙寸・紙色など古文書学的情報の提示は他日を期す.

①＋② **3Kr 7-25 + Дx 3224 verso**

［写真］②DhSPB 10, p.230.

［備考］漢文仏典『妙法蓮華経』（T. Vol. 9, No. 262, 060b02-060b29）紙背の二次利用．3Kr 7-25（lines 1-13）に Дx 3224(lines 14-26）が直接後続する.

① 1 tonguz yïl aram ay
2 bu tavγač kün-tä män tayso [ ]
3 tonguz yïl aram ay [ ]

4 tonguz yïl aram ay (...)[ ]
5 tonguz yïl aram ay (..) (....)[ ]
6 tonguz yïl aram ay bir ygrmikä [ ]
7 tonguz yïl aram ay bir ygrmikä [ ]
8 tonguz yïl bišinč ay biš otu**zqa** [ ]
9 (..) yïl bišinč buyan qulï [ ]
10 [ ] **tu***r*up ür ky-ä [ ]
11 [ ](..)[ ](.) üč(?) [ ]
12 [ ](..)Y üč(?) tutung [ ]
13 [ ](.)č (..)ay buya*n* [ ]

---

② 14 tonguz yïl aram ay üč otuz-**qa** [ ]
15 ït yïl ït yïl [ ]
16 kuyšidu tutung qay-a (.)[ ]
17 kuyšidu tutung [ ]
18 -tä • män kinšidu tutung-qa ya*q***šidu**? [ ]
19 tonguz yïl ikinḍi *a***y** [ ]
20 kuyšidu tutung iri*k***ip** [ ] **bitiyü**
21 tägintim ödig bolzu**n** [ ]
22 tonguz yïl aram ay bir ygrmikä män sivšidu [ ]
23 tonguz yïl aram ay bir ygrmikä män sivšid**u** [ ]
24 bitidim čin ol munï bitig-tä[ ]
25 tonguz [ ]
26 män sivšidu šäli bitidim čïn *ol* [ ]
[missing]

① 1 猪年正月 ·····
2 この漢文の巻子に，私タイソ·····
3 猪年正月 ·····
4 猪年正月 ·····
5 猪年正月 ·····
6 猪年正月十一日に. ·····
7 猪年正月十一日に. ·····
8 猪年第五月二十五日に. ·····

9　年第五　ブヤン＝クリ……

10 ……［残］って，永らく……

11 ……3（？）……

12 ……3人の（？）都統……

13 ……第□月，ブヤン……

――

② 14 猪年正月二十三日に．……

15　犬年　犬年……

16　クイシドゥ都統め……

17　クイシドゥ都統……

18 で，私キンシドゥ都統に，ヤクシドゥ（？）……

19 猪年第二月……

20 クイシドゥ都統が心を痛めつつ……［書き］

21 奉った．記念となるように．……

22 猪年正月十一日に．私シヴシドゥ……

23 猪年正月十一日に．私シヴシドゥ……

24 私が書いた．真である．これを書に……

25　猪……

26 私シヴシドゥ＝シェリが書いた．真である．……

［後　缺］

［語註］

1v24, bitig: 既公刊の写真では不鮮明．　-T- の円弧は小さく，末字も -K ではなく-Z / -N のようにみえるので，他の語の可能性もある．

③ **Дx 3225 verso**

［写真］DhSPb 10, p.230.

［備考］漢文仏典『妙法蓮華經』（T. Vol. 9, No. 262, 048b17-048b29）紙背の二次利用．

1 bars yïl bišinč ay bišyangï bišinč

2 bars yïl altïnč ay iki otuz-qa män pusardu

3 tutung qay-a bitiyü tägintim čïn ol munï bitimiš-tä

1　虎年第五月初（旬の）五日　第五
2　虎年第六月二十二日に．私プサルドゥ
3　都統めが書き奉った．これを書いたときに

［語註］

3v1-2: 前稿で示したシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書のうち，虎年に紀年されるものは１件（4bKr 71）のみであった．本文書により虎年紀年の例が増加した点は重要である．

④ Дx 3226 + 9535 + 9536 verso

［写真］Дx 3226: DhSPB 10, p.231; Дx 9535 + 9536: DhSPB 14, p.173.

［備考］漢文仏典『放光般若經』（T. Vol. 9, No. 221, 081c09-081c23）紙背の二次利用．行配置や筆致から，lines 1-10 についてはA，Bに分類できる．

[missing]

A 1 quꞌlꞌutï bu ta turzun [ ]

A 2 qulutï sivšidu tutung [ ] **tav**ɣ**a**č kü*n-t*ä bitidim

B 3 män yaqšidu tut**ung** [ ] kimqaṭu

A 4 män yaqšidu tutung bitiyü t**ägintim** **č**ïn ol munï

B 5 kuyši-du KW(..)Y

B 6 män sivšidu tutung bitiyü tä**gintim** **čïn** **o**l munï bitimiš-tä

A 7 bitimiš pusardu šäli tiginä sivši**du** [ ] tutung bar {ödig}

B 8 pusardu qul šäli tiginä qal sivšidu [ ] **t**utung

A 9 ärti munča kiši-ning özkintä[ ]m ödig bolmaz-

A 10 -un bolmasa bolmazun [ ](.....)

11 bu bu tavɣač {·:·} ku̱n-tä män (..)[ ]

12 bitidim P munï bitimiš-tä P [ ]

13 yaqṣ̱idu tutung bir-lä PW [ ]

14 tonguz yïl säkizinč ay altï ygr**mikä** [ ]

15 **t***u*tung qay-a iki käṣ̱ig ödiglätim [ ]

[missing]

［前　缺］

A 1 僕　この　残るように．

A　2　僕シヴシドゥ都統·····［漢］文の巻子に私が書いた.
A　4　私ヤクシドゥ都統が書き［奉った．真］である．これを
A　7　書いた（時に）プサルドゥ＝シェリ，ティギネ，シヴシドゥ·····都統が居
A　9　たのであった．このような人の面前で····私は····した．記念と
A　10　なるな．ならないのならなるな．·····

B　3　　私ヤクシドゥ都統·····キムカドゥ
B　5　　クイシドゥ　·····
B　6　私シヴシドゥ都統が書き奉［った．真である］．これを書いた時に
B　8　　プサルドゥ＝クル＝シェリ，ティギネ＝クル，シヴシドゥ·····都統

11　この　この漢文の巻子に私·····
12　　私が書いた．これを書いた時に·····
13　　ヤクシドゥ都統と共に·····
14　猪年第八月十六［日に］·····
15　都統めが２行を記した．·····
　［後　缺］

［語註］

4v1, bu ta: 頻出する bu tavγač kün-tä「この漢文の巻子に」という表現を書こうとして途中で止めたものか.

4v8, qal: qul 「奴，僕」の誤記とみる．語註 **5v16** も参照.

4v12, P: bu 「これ」を書きかけたが，途中で止めて munï「これを」に改めている.

⑤ Дx 12145 + Kr IV 252 + Дx 3650 verso

［写真］Дx 12145: DhSPB 16, p. 46; Дx 3650: DhSPb 11, p.12.

［研究］松井 2004, p.66（Дx 12145[2-3], Kr IV 252[2-3]）.

［備考］漢文仏典『道神足無極變化經』（T. Vol. 17, No. 816, 813c02-813c06）紙背の二次利用．Дx 12145（lines 1-3）→ Kr IV 252（lines 4-10）→ Дx 3650（lines 11-19）の順で直に接合する．なお，line 11 の一部は Kr IV 252，Дx 3650 の双方にまたがって書かれる.

1　道神足變化經
2　bu tavγač kün-tä män pusardu šäli bitiyü **tägintim**

3 čïn'ol aṣun ärmäz ol küskü

---

4 küskü yïl bišinč bu tavγač kün-tä
5 **t**avγač kün-tä bitimäk tamuluq bolγu qïlïnč ol tip
6 saqïnïp män čintso atay qumaγ bitidim čïn'ol aṣun ärmäz
7 küskü yïl törtünč ay altï otuz-qa qulutï kuyšiṭu tutung
8 bu tavγač kün-tä män yaqšidu tutung qy-a bitiyük män
9 küskü yïl bišinč ay biš yangï uluγ yangï kün-tä qulut
10 küskü yïl bišinč ay altï ygrmikä bu tavγač **kün**-*tä* (..)

---

11 män y**aqšid**u tut**ung** *qy-a*
12 y-a qutluγ bolzun kim-ning ög qarïn-ta ünmä*k*
13 **t**uγmaq-lïγ üč yirtinčü-nüng uluγ
14 abita *q***u**r atlγ varxar-ta • amru aγḍïnïp yu̱künsär •
15 ažunïn tuγum-ïn sämritip aγḍïnïp tuγγa**l**ï tuẕ̌it-ta •
16 ïduq tavγač kün-tä qulutï qul kiši yaqši**d**u tutung
17 iki käzig ödig qïltïm ödig ol
18 küskü yïl bišinč ay bir Y[ ](..)[ ]
19 **tav**γ**a**č kün üzä *b***iti***d***im** [ ]

1 道神足變化經
2 この漢文の巻子に私プサルドゥ＝シェリが書き［奉った］.
3 真である．生は無いのである．鼠

---

4 鼠年第五　この漢文の巻子に
5 漢文の巻子に書くことは地獄に落ちる所業である，と
6 考えて，私チンツォ，アタイ，クマグが書いた．真である．生は無い．
7 鼠年第四月二十六日に．僕クイシドゥ都統
8 この漢文の巻子に私ヤクシドゥ都統めが書いた．私
9 鼠年第五月初（旬の）五日（即ち）大新日に僕
10 鼠年第五月十六日に．この漢文の［巻子］に

---

⑤ 11 私ヤクシドゥ都統め
12 ああ幸いあれかし，誰でも人の胞胎から現われ

13　生まれる者（に）．三界の大
14　阿弥陀窟という名の寺院で，常に登り敬礼したとき
15　その生趣を肥饒にし，兜率天に昇って生まれるために
16　聖なる漢文の巻子に，奴僕たる人，私ヤクシドゥ都統が
17　２行の題記をなした．記念である．
18　鼠年第五月……一日［に］ ‥‥‥‥‥‥
19　［漢文］の巻子に［私が書いた］ ‥‥‥‥‥

［語註］

5v1: この漢文題記はオモテ面の漢文仏典の経名『道神足無極變化經』を略記したものと思われる．おそらくウイグル時代以前に書かれたものであろう．

5v3, aṣun ärmäz: 前稿ではこの「生は無い」という表現が浄土思想に関係する可能性を指摘した［松井 2004, p.66］．しかしこの点について，山部能宜氏（東京農業大学）からは，①煩悩を滅しつくした阿羅漢が輪廻から自由になって次の生を受けないという意味か，②般若経典的な意味での「不生不滅」・「空」に近い「無生」を意味するか，いずれかの可能性の方が高いというご指摘を個人的に頂戴した（2004年12月）．山部氏のご教示に深謝する(3)．

5v6, atay: 語頭はX- のようにもみえるので前稿ではあえてQurayと読んだが，やはり頻出する人名に改める．シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書に属する4bKr 33にも同名人物がみえる［松井 2004, pp.54, 66］．

5v7: この行は上下逆に書かれている．

5v9, uluγ yangï kün: この「大新日」は５月５日すなわち端午の節句にあたっているが，あるいは仏教的な斎日を意味する可能性もある．BBAW所蔵のウイグル文『北斗七星延命經』（U 4709）の奥書にも [1]kui šipqan-lïγ ud yïl altïnč [2]ay bir yangï aγïr uluγ posad bačaγ [3]kün üzä「癸丑年第六月初（旬の）一日（即ち）重大なる斎日に」という年月日記載がみえる［BTT XIII, Text 43］．

5v12,ög qarïn: ＝ chin. 胞胎［Uigurica II, p.44］．

5v14-15: 銘文執筆の契機を記すこの２行は４節の頭韻詩をなす：abita qur atlγ varxar-ta / amru aγḍïnïp yu̱künsär / ažunïn tuγum-ïn sämritip / aγḍïnïp tuγγalï tuẓ̈it-ta．末節では頭韻をふむため tuẓ̈it-ta 「兜率天に」を節末に配している．

(3) なお山部氏からは，③トヨク石窟第42窟は浄土経典との関係は希薄であること［Yamabe 2002; Yamabe 2004］，④阿弥陀は大乗仏典で幅広く用いられる仏名であり，「阿弥陀窟」が頻見するからといってシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書を浄土思想と結びつける必要はないこと，をもあわせてご指摘いただいた．従って，拙稿［松井 2004, p.67］で「阿弥陀窟寺」をトヨク所在と推定した際，トヨク石窟第20窟・第42窟の仏教壁画に浄土経典の影響が濃いという宮治昭説を援用した点については再検討の必要があるむね，読者の注意を喚起しておきたい．ただし，前稿［松井 2004, p.62］に掲げた諸点からは，シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書および「阿弥陀窟寺」がトヨクに由来したことは確実である．

5v15a, ažunïn tuγum-ïn: < ažun tuγum(~ tuγum ažun)「生趣」[ED, p.470; DKPAM, pp. 236, 277]．本処では来世を含意するものか．

5v15b, tuγγalï: - γalïの部分は不鮮明である．

5v16, qulutï qul: 一人称謙譲代名詞 qulut(ï)「奴，僕」は qul「奴婢，奴僕」からの派生語である[BTT III, pp.57-58]．本処では両語を重ねてより謙譲の意を強調したものと思われる．この qulutï qul という表現は，やはりシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書に属する 4bKr 36v（lines 1, 2）にも現われる．

5v18, bir Y: bir yangïqa 「初（旬の）一日に」もしくは bir ygrmikä「十一日に」のいずれか．

⑦ Дx 3654 verso

[写真] DhSPB 11, p.15.

[備考] 漢文仏典『放光般若經』(T. Vol. 8, No. 221, 025a23-025a30) 紙背の二次利用．漢文仏典と同方向に記されたウイグル文・漢文各１行をそれぞれ A, B とし，その後に直角方向に書かれた書簡の草稿５行を Lines 1-5 とする．

A　bu tavγač kün-tä män yaqši**d**u šinvapdu **ši***l***a**v*anti* ödiglätim
B　弟子善法奴尸羅萬常書寫受也真彼
1　äsän čïm-kä inim tükäl-ä
2　-kä tuγmïš-a-qa ävtäki barïnč
3　qïz-qa män kimqaṭu šilavanti
4　qïẓïl-taqï buyan o**r**to*q*
5　*ay***tu** ïṭurmän

A　この漢文の巻子に私ヤクシドゥ，シンヴァプドゥ律師が記した．
B　弟子の善法奴尸羅が萬常書を書き奉った．真である．
1　エセンチムへ．我が弟テュケレ
2　へ．トゥグミシャへ．家族の者，バリンチ＝
3　＝キズへ．私キムカドゥ律師が
4　峡谷の福徳の分け前（をもって）
5　お伺い致します．

[語註]

7vA, šinvapdu šilavanti: šinvapdu < chin. 善法奴．このシンヴァプドゥ律師（šilavanti <

skt. śīlavant）は漢文題記の筆者「善法奴尸羅」と同一人物であろう．次註も参照．

7vB: この漢文の書体はきわめて稚拙であり，筆者の善法奴尸羅＝シンヴァプドゥ律師が日常的には漢字ではなくウイグル字を利用していたことは確実である．また，シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書をはじめウイグル文題記にödig bitiyü tägintim（ödig bitidim ~ ödig qïltïm, etc.）čïn ol「私は記念を書き奉った．真である」という表現が頻見することを考慮すると，本処の「弟子善法奴尸羅，萬常書寫受也．真彼」という漢文は，titsi šinvapdu šila ödig(?) bitiyü tägintim čïn ol「弟子シンヴァプドゥ＝シラが記念(?)を書き奉った．真である」というウイグル文に由来すると考えられる．ただし「萬常書」がuig. ödig 「記録，記念，題記」［松井 2004, p.47］に相当するかは不確実である．一方「寫受也」のうち「寫」＝uig. bitiyü < v. biti-「書く」の対応に問題はなく，ウイグル語仏教文献には漢文原典の「受」をtägin-によって訳出する例が頻見する［Uigurica II, p.13; 百濟 1978, pp.81-84; 百濟 1984, p.72; 百濟 1986, pp.162-158; Tattvārthā II, p.350; BTT XX, pp.177-178; 庄垣内 2003, p.364］．Uig. čïn は漢語「真」からの借用語であり［ED, p.424］，漢文仏典の「彼」がol（三人称代名詞・指示代名詞）とウイグル語訳される例も頻見する［e.g. BTT XX, p.171］．ただし，bitiyü tägintim čïn ol「私が書き奉った．真である」という場合のtägin-は「受ける」ではなく謙譲を示す補助動詞であり，olは繋辞（copula）「〜である」の機能を果している(4)．つまり，ウイグル語を母語とする筆者シンヴァプドゥ律師は「受」「彼」など漢語本来の字義には精通していなかったものの，自身の（おそらく仏教漢語のウイグル語訳上の）知識を用いてウイグル文を機械的に漢語に置き換えたと考えられ，本処の漢文はいわば「ウイグル文直訳体」構文をもつとみなせよう．BBAW所蔵のウイグル語仏典断片 U 1568（Zieme 1978, p.85）には「此法友鉆(?)明奴(?)都通／寫受真彼印」という漢文題記がみえ，これも末字の「印」(5)を除けば bu nomdaš qomidu(?) tutung bitiyü tägintim čïn ol「これは法友コミドゥ（鉆(?)明奴(?) < uig. Qomidu < chin. 光明奴）都統が書き奉った．真である」というウイグル文からの「直訳体」構文とみなせる．同じくBBAW所蔵の『千字文』断簡（Ch/U 8152）にも「余勝泉都通受也」「尚泉沙弥受」という漢文題記［西脇 1997, p.103 & pl.20; 西脇 2002, pp.77-79］がみえ，前者を西脇は「余れ勝泉都通，受くる也」と訳したが，これらの題記もそれぞれ män šingtsüin tutung tägintim「私シングツイン（Šingtsüin < 勝泉）都統が（書き）奉った」, šangtsüin šabi tägintim「シャングツイン（Šangtsüin < 尚泉）沙弥が（書き）奉った」というウイグル文に再構すべきである(6)．

7v4-5, qïẓïl-taqï buyan ortoq aytu ïṭurmän: 本処のqïẓil ~ qïsïl「峡谷」は，具体的には，「阿弥陀窟寺」をはじめとする石窟寺院が散在し，シヴシドゥ・ヤクシドゥらのウイグル仏教徒集団の活動の中心地となっていたトヨク峡谷（Tïyoq qïsïl）を意味すると考えられる［松井 2004,

(4) 大英図書館所蔵のウイグル文『觀音經相應』では，繋辞としての olが，正しく繋辞の機能をもつ漢語「是」により漢訳されている［庄垣内 1982, pp.18, 80-81］．
(5) 末字の「印」はおそらくウイグル語原文の漢訳ではなく，捺印の代替であろう．
(6) Abdurishid「ウイグル語訳『千字文』について」第42回羽田記念館講演会，1999年11月20日．

p.63]．この書簡草稿部分の筆者キムカドゥは，仏教聖地としてのトヨク峡谷に参詣・滞在しており，その仏教的善行による功徳・福徳を宛先に挙げられた家族たちにも廻向しようとして書簡を準備したと推測される(7)．Zieme［1995］が公刊したBBAW所蔵のウイグル語書簡Ch/U 7426v（line 3）にもbuyan ortoq aytu ïdurmänという表現が在証される(8)．これをZieme［1995, pp.3-4］は “(Many times) asking for bliss and partner(ship), I send (this message).” と訳す．しかし，本文書の作成の動機が上述したようなものであれば，やはりbuyan（< skt. puṇya）「福徳」とortoq「仲間，パートナー，共同」とが熟して仏教的な「福徳の分け前」を意味しているとみなすべきである［cf. 森安 1985, pp.80-81, 85］．書簡の定型的挨拶表現であるaytu ïdurmänには「お伺い致します」という総訳を与える［吉田・森安 2000, p.168, n.6］．なお，本処のaytu ïṭurmän両語中の -Y- 字は，いずれもまず -W- と誤記した後，左側に独立形のY字を追加して修正している．

おわりに

前稿で58点としたシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書は，本稿で９点が追加され，合計67点（断片を接合すれば56件）まで増加することが判明した．また本稿で追加した５件の校訂テキストからは，シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書がトヨク石窟の「阿弥陀窟寺」で日常的に活動する仏教徒集団により作成されたことを再度確認できた．さらに頭韻詩や，「ウイグル文直訳体」漢文，書簡の定型的書式など，彼らウイグル仏教徒が有していた文化的諸要素を看取し得た．これらの諸点は，未公刊のシヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書の原文書調査とテキスト校訂に際しても歴史学的分析の契機を提供するであろう．さらなる調査・研究を将来の課題としたい．

略号・文献目録

BBAW: Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademienvorhaben Turfanforschung.

BTT III: S. Tezcan, *Das uigurische Insadi-Sūtra*. Berlin, 1974.

BTT XIII: P. Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*. Berlin, 1985.

BTT XX: P. Zieme, *Vimalakīrtinirdeśasūtra*. Turnhout（Belgium）, 2000.

ED: G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkic*. Oxford, 1972.

DhSPb:『俄羅斯科學院東方研究所聖彼得堡分所藏敦煌文獻（*Рукописи из Дуньхуана коллекции Санкт-Петербургского Отделения Института Востоковедения Российской Академии Наук*）』1-17. 上海古籍出版社 / Российской Академии Наук, 1992-2001.

DKPAM: 庄垣内正弘・L. トゥグーシェワ・藤代節『古代ウイグル文 Daśakarmapathāvadānamālā の研究』松香堂，2000.

(7) BBAW 所蔵のウイグル語書簡 U 5977 にも，断片的ながら ^{3}aryaṭan-taqï buyan [　　] ^{4}ïdurmän「阿蘭若の福徳‥‥送ります」という表現がみえる．buyanの直後の缺落部にはortoqを補えよう．

(8) 本文書オモテ面の漢文仏典は『優婆夷浄行法門經』（T. Vol. 14, No. 579, 957a28-957b07）に同定される．Cf. Zieme 1995, p.1.

百濟 康義 1978: 「五十二心所を説くウイグル訳アビダルマ論書断片」『印度学仏教学研究』26-2, pp.81-84.
百濟 康義 1984: 「ウイグル訳『阿毘達磨倶舎論』初探」『龍谷大学論集』425, pp.65-89.
百濟 康義 1986: 「天理図書館蔵ウイグル語文献」『ビブリア』86, pp.180-130, +4 pls.
松井 太 2004:「シヴシドゥ・ヤクシドゥ関係文書とトヨク石窟の仏教教団」森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』朋友書店, pp.41-70.
森安 孝夫 1985:「ウイグル語文献」山口瑞鳳(編)『敦煌胡語文献』(講座敦煌６) 大東出版社, pp.1-98.
西脇 常記 1997: 『ベルリン・トルファン・コレクション漢語文書研究』京都大学総合人間学部.
西脇 常記 2002: 『ドイツ将来のトルファン漢語文書』京都大学学術出版会.
庄垣内 正弘 1982: 『ウイグル語, ウイグル語文献の研究Ⅰ』神戸市外国語大学外国学研究所.
庄垣内 正弘 2003: 『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究』京都大学大学院文学研究科.
SPF: Санкт-Петербургский Филиал Института Востоковедения Российской Академии Наук.
T.: 高楠順次郎 (編)『大正新脩大藏經 (*Taishō Tripitaka*)』大正新脩大藏經刊行会.
Tattvārthā: 庄垣内正弘『古代ウイグル文阿毘達磨倶舎論実義疏の研究 (*Studies in the Uighur Version of the Abhidarmakośabhāṣya-ṭīkā Tattvārthā*)』I-III. 松香堂, 1991-1993.
Uigurica II. By F. W. K. Müller. *Abhandlungen der Preußischen Akademie der Wissenschaften* (Phil.-Hist. Klasse) 1910-3.
Yamabe, N. 2002: Practice of Visualization and the *Visualization Sûtra*. *Pacific World* 3-4, pp. 123-152.
Yamabe, N. 2004: An Examination of the Mural Paintings of Visualizing Monks in Toyok Cave 42. In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan Revisited*, Berlin, pp.401-407.
吉田 豊・森安 孝夫 2000: 「ベゼクリク出土ソグド語・ウイグル語マニ教徒手紙文」『内陸アジア言語の研究』15, pp.135-178.
Zieme, P. 1978: Materialen zum uigurischen Onomasticon, I. *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* (1977), pp.71-86.
Zieme, P. 1995: An Uigur Monasterial Letter from Toyoq.『内陸アジア言語の研究』10, pp.1-8, +1 pl.

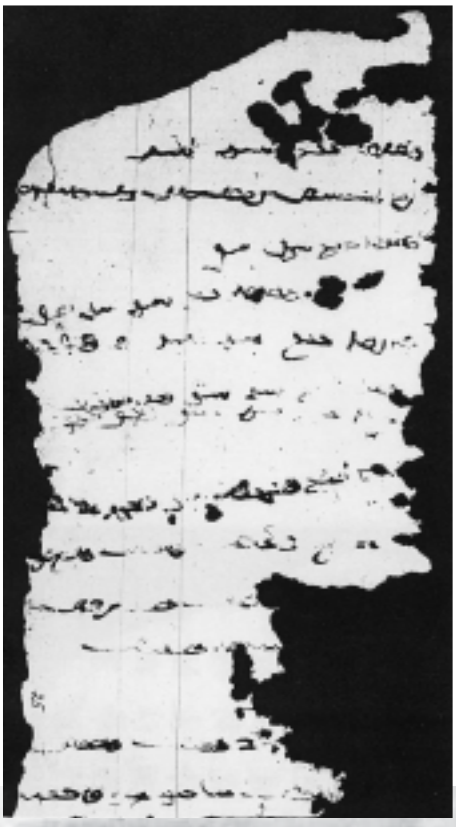
付記 本稿は科学研究費 (若手研究(B)・基盤研究(B)) ・三菱財団人文科学研究助成・学術国際振興基金(A-1-1) による研究成果の一部である.

Supplement to the Uigur Documents Related to Monks Sivšidu and Yaqšidu.

Dai MATSUI

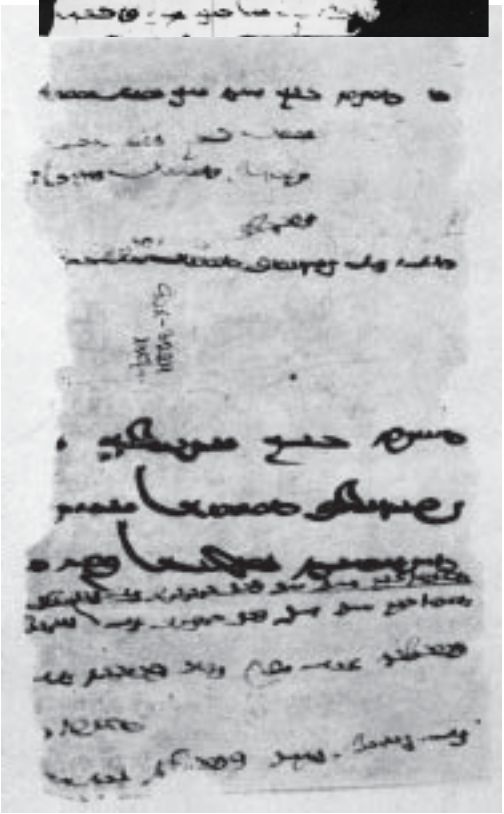
Summary: Recently I presented an article dealing with fifty-eight Uigur documents related to Buddhist monks Sivšidu and Yaqšidu, who belonged to the Buddhist monastery of the Toyoq Caves (Dai Matsui, “Notes on the Uigur Secular Documents from the St. Petersburg Collection.” In: T. Moriyasu (ed.), *Papers on the Pre-Islamic Documents and Other Materials Unearthed from Central Asia*, Kyoto, 2004, pp.41-70). In this paper, I supplement the fifty-eight documents with other nine fragments which are also related to the Buddhist monks and the Toyoq Caves.

Plate I



① **3Kr 7-25 verso**

(Reproduced by permission of the Toyo Bunko)



② **Дх 3224 verso**

(after DhSPb 10, p. 230)

Plate II



③ **Дх 3225 verso**

(after DhSPb 10, p. 230)



④ **Дх 3226 verso**

(after DhSPb 10, p. 231)



Дх 9535 + 9536 verso

(after DhSPB 14, p. 173)

Plate III

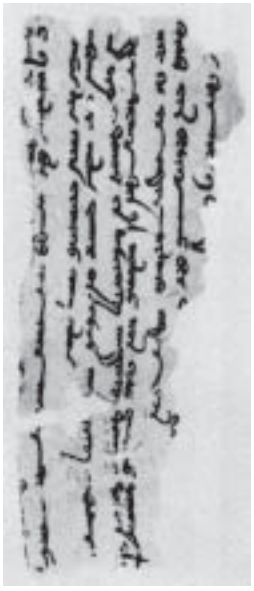
⑤ Дх 12145 + Kr IV 252 + Дх 3650 verso



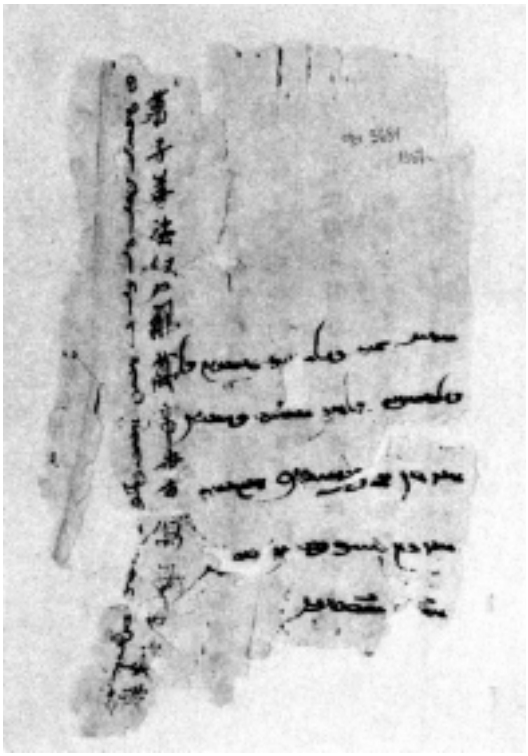
Дх 12145
(after DhSPB 16, p.46)



Kr IV 250
(Reproduced by permission
of the Toyo Bunko)



Дх 3650
(after DhSPB 11, p. 12)



⑦ Дх 3654 verso

(after DhSPb 11, p. 15)